平安・鎌倉時代の和文における「はつ(果)」「をはる(終)」の意味用法

――補助動詞的な複合動詞後項の意味用法の通時的研究のために――

岡野幸夫

一　はじめに

いわゆる中世王朝物語（注一）は、平安時代の物語（とくに源氏物語以降の作品）の影響を強く受けている。そのことは、国文学研究において、物語の構想や個々の場面の出所などについて種々の指摘がなされていることからもうかがうことができる。しかし、国語学の側からの研究はあまり進んでいない。それは、個々の作品の作者や成立時期・現存伝本の素性が明らかでないことから、国語史の資料として扱いにくいからである。

ただし、最近、これらの物語群の文学史的価値が再考されつつあり、物語の内部徴証や種々の外部資料をもとに成立年代の推定がなされている。これらの成果を勘案することにより、中世王朝物語を国語史の資料として活用することができると考える。

その視点の一つとして、複合動詞の通時的研究があげられる。複合動詞は、平安時代和文において、登場人物の複雑な動作を多彩に表現する役割を果たしていた。複合動詞の語彙論的研究や意味論的研究を通時的に行なう場合、平安時代物語文の流れの延長線上にある中世王朝物語は、重要な資料であると思われる。別の視点として、鎌倉時代にはさまざまなジャンルの文献が存することから、平安時代の文献のみでは困難だった、和文の複合動詞の文体的性格を相対化して捉えることも可能となる。

また、補助動詞的な複合動詞後項に注目するのは以下の理由による。補助動詞的な複合動詞後項のうちのあるものは、時代がくだるにしたがって接続助詞「テ」をともなって「動詞＋テ＋後項」という形態に変化する（注二）。今回とりあげる「はつ」「をはる」（および注三に掲げた類義関係にある語群）にはそのような形態の変化は認められないが、現代語では用いられなくなっているものがいくつかみられることから、複合動詞の語構成法・類義複合動詞語彙の

通時的研究をすすめるうえで重要なテーマと考えられるのである。

本稿では、右のような問題意識をふまえ、動作・事柄の終了を表わす動詞「はつ（果）」「をはる（終）」をとりあげ、それぞれの意味用法を整理し、平安時代後期と鎌倉時代後期の二つの共時態を比較検討する。これにより、「はつ」「をはる」の意味用法には時代差が存することを明らかにする。また同時代の資料であっても、文章ジャンルによって意味用法に違いが認められることをも述べる。

二　研究の対象と方法

互いに類義関係にある補助動詞的な複合動詞後項について、平安時代後期と鎌倉時代後期（南北朝時代を含む）の二つの共時態における文献に現れる種類を確認し、意味用法を検討する。類義関係にある語群を取り上げることにより、時代差や文体差が観察しやすくなると考えるからである。

対象とすべき語は多岐に亙るが、本稿では、動作の終了を表わす「はつ（果）」「をはる（終）」のペアを対象として考察する（注三）。

「はつ」「をはる」について、「をはる」が漢文訓読語に属する語であるということが築島裕氏によって明らかにされている（注四）。また、大坪併治氏は、奈良時代から院政時代にかけて「はつ」「をはる」の用例を幅広く収集・検討し、奈良時代には両者は併用されていたが、平安時代になると漢文訓読文では「をはる」が、和文では「はつ」が主に用いられるようになり、院政時代に至って和漢混淆文の成立により、両者は再び併用されるようになったことを明らかにした。また、訓点資料・変体漢文における「はつ」「をはる」の用字法についても述べた（注五）。

右の先学が指摘し、本稿でも後述するように、平安時代において「はつ」「をはる」は文体の違いにより使い分けられていたことがわかる。本稿は、この点をふまえて、和文における「はつ」「をはる」の使用の実態と変遷とを明らかにし、さらに中世王朝物語における用法を共時的に検討する。

調査文献は、以下のとおりである（注六）。

○平安時代文献

（物語）　源氏物語

○鎌倉時代文献

（説話）　十訓抄・古今著聞集

（物語）　あきぎり・風に紅葉・小幡の時雨・恋路ゆかしき大将・しのびね物語・白露・兵部卿物語・松陰中納言物語・八重葎・別本八重葎・山路の露

（日記）　うたたね・十六夜日記・中務内侍日記・とはずがたり

（随筆）　徒然草（南北朝）

（軍記）　保元物語・平治物語・平家物語〔覚一本〕

三　用例の概観

まず、次の表を参照されたい。この表は、各文献に現れる「はつ」「をはる」の用例数を掲げたものである。表中、括弧内の数字は「はつ」「をはる」が複合動詞後項になるものの数である。

○各文献における「はつ」「をはる」の用例分布状況

	はつ（～はつ）	をはる（～をはる）
源氏物語	37（110）	2（—）
十訓抄	10（13）	9（4）
古今著聞集	32（26）	30（10）
あきぎり	3（16）	—（—）
風に紅葉	9（10）	—（—）
小幡の時雨	2（8）	—（—）
恋路ゆかしき大将	5（18）	—（—）
しのびね物語	4（6）	—（—）
白露	—（16）	—（—）
兵部卿物語	3（6）	—（—）
松陰中納言物語	1（13）	2（1）
八重葎	—（9）	—（—）
別本八重葎	—（2）	—（—）
山路の露	1（5）	—（—）
うたたね	—（17）	—（—）
十六夜日記	—（10）	—（—）
中務内侍日記	23（7）	—（—）
とはずがたり	34（24）	7（—）
徒然草	5（4）	—（—）
保元物語	2（11）	1（1）
平治物語	—（7）	—（1）
平家物語（覚一本）	4（29）	11（4）

（注）「～はつ」「～をはる」の数値は異なり語数

この表から「はつ」が主に用いられていることがわかる。また、「をはる」が用いられている文献は、主に説話と軍記であることがわかる。このことから、文章ジャンルの相違と用語との間に何らかの関係が存していることが予想されるのである。

それでは以下、具体的な用例の検討に移る。

四　平安時代和文の用例について

ここでは、「源氏物語」を中心に用例を検討する。

「源氏物語」では、「はつ」が三十七例用いられているのに対し、「をはる」は二例しか用いられていない。そして両者の意味用法には大きな相違が認められるのである。

まず、「はつ」「をはる」の用例を検討する。

○「はつ」

・せうにに|むはて|ゝのほりなとするにはるけきほとにことなるいきをいなき人はたゆたいつゝすか〳〵しくもいてたゝぬほとに（玉かつら・七二一⑩）

↓ 太宰少弐の任期

・さかつきのめくりくるもかしらいたくおほゆれはけしき許にてまきらはすを御覧しとかめてもたせなからたひ〳〵しゐ給へははしたなくてもてわつらふさまなへての人にゝすおかし心地かきみたりてたへかたけれはまたこともはてぬにまかて給ぬるまゝにいたくまとひて（わかな下・一二一八③）

↓ 朱雀院五十賀の試楽の宴

・このりしにかならすいふへき事のあるをこしんなとにいとまなけなめるたゝいまはうちやすむらむこよひこのわたりにとまりてそやのしはてん程にかのゐたるかたにものせむこれかれさふらはせよ（夕きり・一三一五⑥）

↓ 一条御息所の病についての律師の初夜の勤行

・たそかれ時のいみしく心ほそけなるにあめはひやゝかにうちそゝきて秋はつるけしきのすこきにうちしめりぬれ給へるにほひともは世のものにすえむにてうちつれ給へるを（あけまき・一六三二③）

↓ 宇治の秋

・ともしひなとのきえいるやうにてはて給ぬれはいふかひなくかなしき事をおほしなけく（うす雲・六一七⑥）

↓ 藤壺の命

○「をはる」

・いとそうしかたくかへりてはつみにもやまかりあたらむと思給へはゝかるかたおほかれとしろしめさぬにつみをもくて天けんおそろしく思給えらるゝ事を心にむせひ侍つゝいのちをはり侍りなはなにのやくかは侍らむ仏も心きたなしとやおほしめさむとはかりそうしさしてえうちいてぬ事あり（うす雲・六一九⑦）

↓ 夜居の僧都の命（夜居の僧都が冷泉帝に言上する言葉）

・いのちをはらむ月日もさらになしろしめしそいにしへより人のそめをきける藤衣にもなにかやつれ給はんたゝ我身はへん化の物とおほしなして老法師のためには功徳をつくり給へ（わかな上・一〇九六①）

↓ 明石入道の命（明石上への明石入道の最後の手紙）

「はつ」は、第一例から第四例に掲げた用例のように、事柄が終了する意味で用いられ、転じて、「源氏物語」には一例みられるだけであるが、第五例のように、人が死ぬ意味で用いられる。「終了

スル」という意味で広く用いられており、以下に語形のみを列挙するが、複合動詞後項として「動作ガ終了スル・動作ヲ最後マデ行ナウ」という意味で非常に多くの複合動詞を形成している。

○「～はつ」

あかしはつ（明）あきはつ（飽）あきらめはつ（明）あくがれはつ（憧）あけはつ（明）あげはつ（上）あなづりはつ（侮）あらしはつ（荒）あらはしはつ（顕）ありはつ（有）あれはつ（荒）いけはつ（生）いなびはつ（否）いひはつ（言）いりはつ（入）うけたまはりはつ（承）うしなひはつ（失）うせはつ（失）うちとけはつ（解）うちはつ（打）うつりはつ（移）うつろひはつ（移）うとみはつ（疎）うらみはつ（恨）おかれはつ（置）おきなびはつ（翁）おこたりはつ（怠）おこなひはつ（行）おちゐはつ（落居）おとなびはつ（大人）おはしはつ（在）おぼししりはつ（思知）おぼしはつ（思）おもひすてはつ（思捨）おもひたちはつ（思立）おもひはつ（思）おもひはなれはつ（思離）おやがりはつ（親）かうじはつ（講）かざりはつ（飾）かなひはつ（叶）かれはつ（枯）かれはつ（離）きえはつ（消）ききはつ（聞）きこしめしはつ（聞召）くたしはつ（朽）くれはつ（暮）こころえはつ（心得）こころみはつ（試）ごらんじはつ（御覧）さだまりはつ（定）さめはつ（覚）さりはつ（去）したがひはつ（従）したためはつ（調）しづめはつ（鎮）しにはつ（死）しのびはつ（忍）しはつ（為）しらべはつ（調）しりはつ（知）すぎはつ（過）すぐしはつ（過）すすぎはつ（濯）すまひはつ（辞）すみのぼりはつ（澄上）すみはつ（住）すみはつ（澄）そぎはつ（削）そむきはつ（背）たえこもりはつ（絶籠）たえはつ（絶）たすけはつ（助）たちはつ（断）たひらぎはつ（平）つきはつ（尽）つくしはつ（尽）つくりはつ（作）つたへはつ（伝）つつみはつ（包）ときはつ（解）ととのひはつ（整）とまりはつ（止）ながしはつ（流）なくなりはつ（無）なしはつ（成）なりはつ（成）ねんじはつ（念）のたまはせはつ（宣）のたまひはつ（宣）のぼりはつ（上）ひきはつ（弾）ほれはつ（惚）まぎれはつ（紛）まひはつ（舞）みあらはしはつ（見顕）みえはつ（見）みしりはつ（見知）みはつ（見）もてなしはつ（為）もてはなれはつ（離）よみはつ（読）よりはつ（寄）りやうじはつ（領）わかれはつ（別）わすれはつ（忘）ゐじはつ（怨）ゐんじはつ（怨）ゐんぜられはつ（怨）

一方、「をはる」は、二例しかみられず、しかも、意味用法が固定している。すなわち、僧都や入道といった仏教関係者の言葉としてしか用いられておらず、しかも「いのちをはる」という、主体が「命」に限定された表現であり「死ヌ」という意味を表わす。これらの用例から、「をはる」は仏教関係者の言葉であることを明示し

ようとする表現意図に基づいて用いられていると考えることができる。したがって、このような特別な表現意図が働かない箇所においては「をはる」は用いられず、「をはる」を後項にとる複合動詞もみられない。

この、「はつ」「をはる」の分布や意味用法の偏りは、「源氏物語」に限ったことではなく、平安時代の和文資料一般にあてはまる。「はつ」はごく普通に用いられているのに対し、「をはる」が用いられている作品は「伊勢物語」（一例）「かげろふ日記」（一例）「宇津保物語」（一例）「源氏物語」（二例）「栄花物語」（二例）しかなく、用例数も「はつ」とは比較にならないほど少ない（注七）。しかもその用例は「仏教行事ガ終了スル」という意味を表わすか、あるいは「死ヌ」意味を表わす定型表現であり、意味用法には限定が認められるのである。これに関連して、築島裕氏は「をはる」を漢文訓読語としている（注八）。すなわち、平安時代においては、和文対漢文訓読文という文体の違いに応じて「はつ」「をはる」は使い分けられていたと考えられる。和文においては、普通「はつ」が用いられ、「をはる」は「死ヌ」または「仏教行事ガ終了スル」という意味でのみ限定的に用いられるのである（注九）。そして「死ヌ」という意味の定型表現をなす「いのちをはる」は、「うす（失）」「かくる（隠）」「しぬ（死）」「なくなる（亡）」「はかなくなる（儚）」等のいわゆる死亡表現の一つとして、作品中で右に述べたような特別な機能を果していると考えられるのである。

以下に参考として、「源氏物語」以外の平安時代和文資料にみられた「をはる」の全用例を掲げておく。

（参考例）

・右大将にいまそがりけるふぢはらのつねゆきと申すいまそがりて、かうのをはるほどに、うたよむ人〳〵をめしあつめて、けふのみわざを題にて、春の心ばえあるうたたてまつらせたまふ。（伊勢物語・七七段・岩波日本古典文学大系一五五頁）

↓ 文徳帝の女御たかきこの法要

・としかへりて、はるなつもすぎぬれば、いまはてのことすとて、こたびばかりは、かのありし山でらにてぞする。（中略）あるべきことさもをはりてかへる。やがてぶくぬぐに、にびいろのものども、あふぎまではらへなどするほどに、（かげろふ日記・康保二年秋・『改訂新版かげろふ日記総索引　本文篇』五三頁）

↓ 作者の母の一周忌

・すゑふさ「けたうの大弁なんかげの大臣の一男として、れう給はれるにやわらはに侍。なんかげの左大弁、参議にてはべりしほど、つはものゝためにめいをはり、兄弟とおくのこるかばねなくほろびはてゝ、すゑふさひとりなんかれがのちとて侍。（宇津保物語・祭の使・『宇津保物語　本文と索引　本文編』四四一頁）

↓ なんかげの命（男性会話文）

・行道をはりて左方は五大堂の南のひさしにつき右方は阿弥陀堂のひんかしのひさしにつき（ぬそのつき〳〵は）れいのさほうのことゝもをしはかるへし（栄花物語・巻第十七おむかく・二〇⑪・『栄花物語本文と索引 本文篇』）

↓ 堂供養の行道（道長、法成寺金堂を建立）

・殿ゝうちもよろつに御いのりもさはきけるに四日のよさり殿の御まへのおはらせ給しおりにこそうせ給にけれ（栄花物語・巻第三十つるのはやし・二五⑤・『栄花物語本文と索引 本文篇』）

↓ 殿（道長）の命

五　鎌倉時代文献の用例について

ここでは、まず、文体的にみて平安時代物語文の延長線上にあると考えられる中世王朝物語の用例を検討し、「はつ」「をはる」の意味用法を明らかにする。次に、鎌倉時代の他の文献の用例を併せて検討する。これにより、鎌倉時代の「はつ」「をはる」の意味用法を整理し、中世王朝物語の「はつ」「をはる」の意味用法を相対化して捉える。

五・一　中世王朝物語の用例

中世王朝物語では、主に「はつ」が用いられている。また、「はつ」を後項にとる複合動詞も多く存在する。この傾向は、平安時代物語文の傾向と類似する。

○「はつ」

・せうしやう、よびきこえ給ひて、「かまへて申なぐさめきこえ給へ。かひなくとも、よにあらんかぎりはとこそおぼえはんべれ。いみはてなば、やがてむかへたてまつらん」など、きこえ給ふにも、（あきぎり上・一七頁）

↓ 喪中の期間

・つく〳〵とのみながめをはするあか月がた、とよのあかりのせちゑのよなりけり。大将君、はつるやをそきと、これへいで給へれば、さすがよの事ども□（とカ）ひきこゑ給。（風に紅葉 巻二・五〇四頁）

↓ 豊明の節会

・ことなりて、経仏などわたし奉り給ふに、御こたち、かんだちめさしつどひ給ふ中に、中納言のしめやかにもてなしておわするを、ふとみつけたる心のうち、「たゞいまこゝに、かくてありとは、よもしり給はじ」とおもふも物をおもふにや、あほみやせ給へるしも、なまめかしさぞまさり給へるに、ことはてぬれば、いそぎかへり給ても、たちいでつらん事のみ心うし。（小幡の時雨・二〇四頁）

↓ 供養の行事

・そらだきのかくゆりいでたるみすの中、思ふも気たかくやんごとなきに、てうはいはてゝ殿いで給へる程、はいらいのぎしき、にはのいさごたまをしけるも、いまにはじめぬ事なれど、御ぬしからに、よろづひかりをそへてみゆるも、あながちなる人の心のなしにやあらん。（恋路ゆかしき大将　四・二九五頁）

↓ 元旦の年賀の行事

・かしこの御ありさま、いはんかたなく、大将殿のこゝろをつくし給ひけん程あらはれて、めもかゝやく心ちす。女ばう三十人ばかり、しろき袴にてなみゐたり。ことゞもはてゝ、夜ふくるほどに、御きちやうおしやりて見給へば、松がさね十ばかりに、しろきはかまぞみゆる。（しのびね物語・四四頁）

↓ 婚礼の行事

・こゝにはめのとぐわんはてゝかへるに、きみあるかなきかのさまにてふしたまふをこゝちまどひつゝ、いかなる御こゝちにかとおもひまどふを、（兵部卿物語・一三頁）

↓ 清水への参籠

・我はみぎのむまのかみにて、年久しくつかうまつり給ひしに、思はざりし事いできてのり（ちカ）、つしまのかみになりて三年がほどさぶらひしかど、はてゝの後も、かへりて人に立まじらひなんも心うきよに、（松陰中納言物語・一三四頁）

↓ 対馬守の任期

・此はしつかたにおこなふ人あるにや、経を巻返したるをとも忍びやかになつかしう聞えて、しめ〳〵と物哀なるに、何となくやがて御涙もすゝむ心ちしてつく〳〵とみゐ給へるに、とばかりありて、をこなひもはてぬるにや、「いみじの月の光や」と独ごちて、（山路の露・一八頁）

↓ 勤行

○「をはる」

・僧都のもとへわたらせ給ふて、「此比のあつかはしさに、いとゞ嶋陰の物しづかなる事をおもひいでられさぶらへ。春たちし日より、ことたつとて心のいとまなく、節会より斎院の御禊につゞき、南殿の御会のやう〳〵事をはりにければ、女御のみだり心ちのうちには、いかばかりの心をつくすらん。（後略）」（松陰中納言物語・一一四頁）

↓ 南殿の御会

・講のおはりける程に、かんだちめ、そのほか御池に舟をさして、物の音をふきならし給へば、折から月はくまなくさし出て、はちすの花に、にほひわたれば、仏の御国の心地ぞせられ給へる。（松陰中納言物語・一二八頁）

↓ 法華八講会

○「〜はつ」

あけはつ（明）あらしはつ（荒）ありはつ（有）あれはつ（荒）あをみはつ（青）いなびはつ（否）いりはつ（入）うせはつ（失）うづもれはつ（埋）うつりはつ（移）うらみはつ（恨）うんじはつ（倦）おくしはつ（臆）おこたりはつ（怠）おこなひはつ（行）おぼしはつ（思）おもひはつ（思）おろしはつ（下）かくしはつ（隠）かはりはつ（変）かれはつ（枯）きえはつ（消）くちはつ（朽）くもりはつ（曇）くれはつ（暮）こりはつ（懲）さはやぎはつ（爽）さめはつ（褪）さりはつ（去）しはつ（為）しづみはつ（沈）しのびはつ（忍）しはつ（為）しつらひはつ（設）しりはつ（知）すてはつ（捨）すみはつ（住）すみはつ（澄）そむきはつ（背）たぐへはつ（類）たえはつ（絶）ちりはつ（散）つきはつ（尽）つつみはつ（包）とだへはつ（跡絶）とぢはつ（閉）とぢめはつ（閉）ながらへはつ（長）なしはつ（為）なりはつ（成）ふけはつ（更）へだたりはつ（隔）へだてはつ（隔）まがひはつ（紛）みちびきはつ（導）みはつ（見）やつしはつ（窶）よみはつ（読）よわりはつ（弱）わすれはつ（忘）わびはつ（侘）ゑみはつ（笑）

○「〜をはる」

つくりをはる（作）

また、中世王朝物語には、「をはる」の用例がみられ、「をはる」を後項にとる複合動詞も一例ながらみられる。しかし、「源氏物語」においてみとめられたような特別な表現意図をもったものではない。そして「法華八講会」といった仏教行事の場面で用いられる他に、「南殿の御会」という、仏教とは関係のない公的行事の場面でも用いられている。したがって、仏教に関係した場面でしか用いられていなかった平安時代の用法から、わずかに拡大した用法となっている。これは、事柄の性質として、仏教行事と公的行事とが重なる一面を持っていたためであろうと思われる。仏教行事の中でも、貴人の法要（前掲伊勢物語の用例）や、天皇・公卿が参列する堂供養（前掲栄花物語の用例）などは公的な行事ともとらえられていたであろうから、「をはる」が普通の公的行事に対しても用いられるようになったのであろう。結論として、中世王朝物語においては、「をはる」の意味用法が、平安時代のそれと比較すると、わずかに拡大していることがわかった。

では、同じく和文である中世女流日記の用例を検討してみよう。

五・二　中世女流日記の用例

中世女流日記では、「はつ」が主に用いられているが、「とはずがたり」では、「をはる」が七例用いられている。平安時代和文や中世王朝物語よりも比較的多く「をはる」が用いられている。

○「はつ」

・花山院大納言ふえ、大夫殿たいこ、さらぬ殿上人ども。りちには月の光もことなるに、ばとうのまいゝでたる程は、まことにおもしろし。名ごりおほくてはてぬ。（中務内侍日記 上・二二七頁）

↓ 舞楽

・女工所はてぬほどは、ほかに夜をこさぬことにて、あからさまにまいりて、かねうたぬさきに女工所へかへる。（中務内侍日記 下・二六一頁）

↓ 女工所の職務

・御神楽はてぬれば、人〳〵ろくたまはりていでぬ。をみのすがた、あくる日影にかゝやきて、やさしくみゆ。（中務内侍日記 下・二六五頁）

↓ 神楽

・うち、院のをば、左衛門督どくし、殿下たび〳〵かうぜらる。ひかうはてぬればまづ春宮いらせ給。（とはずがたり 巻三・一六二頁）

↓ 准后の九十賀の和歌の会の披講

・かなしさもけふとちむべき心ちして、さしもあつく侍し日影も、いとくるしからずおぼえて、むなしき庭にのこりゐて候しかども、御仏事はてしかばくわんぎよいし〳〵とひしめき侍しかば、（とはずがたり 巻五・二三八頁）

↓ 後深草院の一周忌の仏事

・神無月廿日ごろより、はゝかたのうば権大納言、わづらふ事ありといへども、いましも露のきゆべしとも、みる〳〵おどろかで侍ほどに、いく程の日かずもつもらで、「はやはてぬ」とつげたり。（とはずがたり 巻一・三八頁）

↓ 祖母の命

○「をはる」

・念仏のまゝにてをはらましかば、行末もたのもしかるべきに、よしなくおどろかして、あらぬことの葉にていきたえぬるも心うく、（とはずがたり 巻一・二八頁）

↓ 父の命

・五ぶの大ぜう経をてづからかきて、をのづからみづぐきのあとを、一まきに一もじづゝをくわへてかきたるは、かならずげかいにて、いま一どちぎりをむすばんの大願なり。いとうたてあるこゝろなり。この経、しよしやはおはりたる。（とはずがたり 巻三・一四一頁）

↓ 五部大乗経の書写

・ことさら物のねとゝのほりておもしろきに、二へんをはりてのち、「なさけなきことをきふにねたむ」と、一院えいぜさせおはしましたるに、新院、東宮御こゐくわへたるは、なべてにやはきこへ

ん。がくをはりぬれば、くわん御あるも、あかず御名残をゝくぞ、人々申侍し。（とはずがたり 巻三・一六五頁）

↓ 准后の九十賀の管弦の催し

・夢の御おもかげもさむるたもとに残りて、しや経をはり侍しかば、ことさらのこしもちまいらせたりつる御衣、いつまでかはとおもひまいらせて、御ふせに、なく〳〵とりいで侍しに、（とはずがたり 巻五・二四一頁）

↓ 写経

・とかくうかがひて、あまだりの石のへんにてちやうもんするにも、むかしながらの身ならましかばと、いとひすてしいにしへさへ恋しきに、御願文をはるより、せんほうすでにをはるまで、すべて涙は、えとゞめ侍らざりしかば、（とはずがたり 巻五・二四七頁）

↓ 後深草院の三回忌の行事

○「〜はつ」

あけはつ（明）ありはつ（有）いひはつ（言）いりはつ（入）おこなひはつ（行）おとろへはつ（衰）おほせはつ（仰）おもひはつ（思）かきはつ（書）かれはつ（枯）きえはつ（消）ききはつ（聞）くたしはつ（腐）くちはつ（朽）くれはつ（暮）こえはつ（越）こりはつ（懲）しづまりはつ（静）しもがれはつ（霜枯）しりはつ（知）しをれはつ（萎）すてはつ（捨）すみはつ（澄）たえはつ（絶）ちりはつ（散）つきはつ（尽）つみはつ（積）とぢめはつ（閉）とほざかりはつ（遠）とまりはつ（止）なくなりはつ（亡）なしはつ（成）なびきはつ（靡）ならひはつ（慣）なりはつ（成）へだたりはつ（隔）へだてはつ（隔）ほれはつ（惚）まはりはつ（回）みはつ（見）むすびはつ（結）よはりはつ（弱）わすれはつ（忘）わびはつ（侘）

中世女流日記は、中世王朝物語に近い傾向を示す。すなわち、「はつ」が主に用いられ、「をはる」は仏教行事や公的行事の場面に限定的に用いられている。ただし、「をはる」の用例数が比較的多い。これは、宮廷の行事を多く記している中世女流日記作品の内容が反映したものか。

ただし、後述する説話や軍記とは異なり、「をはる」を後項にとる複合動詞はみられない。

五・三 「徒然草」の用例

「徒然草」では、「はつ」が五例用いられているのに対し、「をはる」は用いられていない。

○「はつ」

・春暮（れ）てのち夏になり・夏はてゝ秋のくるにはあらず・（一

五五段）

↓ 夏

・さしたる事なくて・人のがりゆくはよからぬ事也・用有（り）て行（き）たりとも・其（の）事はてなばとく帰るべし・久しく居たるいとむつかし・（一七〇段）

↓ 用事

・此（の）度若たちなをりて命をまたくせば・夜を日につぎて・此（の）事彼（の）事・をこたらず成じてんと願ひをおこすらめど・やがてをもりぬれば・我にもあらず・取（り）みだしてはてぬ（二四一段）

↓ 命

○「～はつ」

あせはつ（褪）くれはつ（暮）すみはつ（住）つくりはつ（作）

「徒然草」は、中世王朝物語や「とはずがたり」と同様の傾向を示す。ただし、用例数が少ないため、断定的なことは言えない。いわゆる擬古文であるとされる「徒然草」は、あるいは平安時代の用語選択の実態を受け継いでいるか。後考を要する。

五・四　説話の用例

説話では、「はつ」「をはる」は数の上では同等に用いられている。

○「はつ」

・定子皇后（中関白道隆御女）ハ一条院ノ后也。御父ノ中関白ノ御タメニ御仏事ヲ被行ケリ。事ハテヽ出ホトニ、長月十日アマリノ比ナリケレハ、秋風身ニシミテ、（十訓抄　一・上三二頁）

↓ 父の法事

・或時、サキ〳〵ノヤウニ来迎院ヘ参タリケルニ、例時ノ程ニテ、御堂ノ局ニ入レテ、「例時ハテヽアハン」ト有ケル程ニ、女房心ノウチニ思ヤウ、（十訓抄　十・下一五三頁）

↓ 例時の勤行

・昔佐理卿（小野宮少将敦敏子）、大弐任ハテヽノホラレケル道ニテ、伊予国三島明神ノ託宣アリテ、彼社ノ額ヲカヽレタリケルモ目出タカリケリ。（十訓抄　十・下一六二頁）

↓ 大弐の任期

・春日山に神光ありけるが、合戦はてゝ見えず成にけり。（古今著聞集　一八・巻第一神祇第一・六〇頁）

↓ 合戦

・例時の程に成にければ、寺へ出ぬ。例時はてゝ僧ども出けるに、

（古今著聞集 五六・巻第二釈教第二・九二頁）

↓ 定例の仏事

・つゐに前太政大臣、まづまいりて詩をたてまつる。披講はて丶いで給て後、太政大臣かはりて座につき給けり。（古今著聞集 九八・巻第三公事第四・一一七頁）

↓ 詩歌の披講

・事はて丶返上すとて、「所〳〵こはき穴候へども、心えてつかうまつり候へば、神妙に候也」とぞ申しける。（古今著聞集 二七五・巻第六管絃歌舞第七・二二五頁）

↓ 笛の試し吹き

○「をはる」

・「コハイカヽスヘキ。御誦経ナト重テスヘキ」ト被仰ケル間、御詞イマタヲハラサルニ、（十訓抄 一・上四四頁）

↓ 言葉

・サテ其時読・（給落歟）ヘル歌、

ノリノ月ヒサシクモカナト思ヘトモ サヨフケヌラシヒカリカクシツ

カクテ身心安楽ニテ終リ給ニケリ。（十訓抄 四・上一一七頁）

↓ 命（死）

・近ハ壬生ノ二位家隆卿（猫間中納言光隆子）、八十ニテ天王寺ニテ終リ給ケル時、三首ノ歌ヲヨミテ廻向セラレケル。臨終正念ニテ、其志ムナシカラサリ。（十訓抄 十・下一四二頁）

↓ 家隆の命

・隆綱・俊明共ニ立テ舞ケリ。楽ヲハリテ院禅・慶禅コトニ調子ヲ引ク。（十訓抄 十・下一五四頁）

↓ 舞楽

・七月十五日安居のおはる夜、験くらべを行けるに、（古今著聞集 四六・巻第二釈教第二・八二頁）

↓ 安居

・廿五日平正に、光明遍照の四句の文を唱て、慈覚大師の九条の袈裟を着して、頭北面西にして、ねぶるがごとくにして、おはり給にけり。（古今著聞集 六三・巻第二釈教第二・九八頁）

↓ 源空上人の命

・舞いまだおはらざりけるに、法皇の召によりて、胡飲酒の童まいりけり。（古今著聞集 二五九・巻第六管絃歌舞第七・二一一頁）

↓ 舞

・御仏事座々をかさねて、事をはりて罷出ける。（古今著聞集 四六八・巻第十三哀傷第廿一・三七一頁）

↓ 後高倉院四十九日の仏事

・をの〳〵披講畢て朗詠あり。（古今著聞集 跋・巻第二十・五四一頁）

↓ 詩歌の披講

説話では、「はつ」も「をはる」も数の上では同等に用いられる。また、用法上も両者は接近している。すなわち、「詩歌の披講」といった共通する事柄に対して、「はつ」と「をはる」とが用いられた例がみられるのである。「仏事」についても同様である。しいて違いを見出すとすれば、「古今著聞集」において、「はつ」は全巻にまんべんなく用いられるのに対し、「をはる」は約三分の一が巻第二釈教に用いられている、という点があげられるが、傾向として指摘できる程度の相違である。この傾向は、典拠となった文献の用語が反映したものか。後考を要する。いずれにせよ、平安時代和文において認められた「はつ」「をはる」の使用上の偏りは、かなり緩和されている。

○「〜はつ」

いはせはつ（言）いひはつ（言）うらみはつ（恨）おいはつ（老）かくしはつ（隠）かはりはつ（変）ききはつ（聞）くひはつ（食）こもりはつ（籠）こりはつ（懲）しはつ（為）すてはつ（捨）そりはつ（剃）だんじはつ（弾）つきはつ（尽）つくしはつ（尽）とりはつ（取）なしはつ（成）なりはつ（成）のりはつ（乗）ひきはつ（弾）へだてはつ（隔）まきはつ（巻）まきはつ（蒔）まひはつ（舞）みはつ（見）よわりはつ（弱）わすれはつ（忘）わたしはつ（渡）

○「〜をはる」

えらびをはる（選）かうじをはる（講）かきまゐらせをはる（書進）かきをはる（書）かりをはる（刈）しるしをはる（記）ずしをはる（誦）つたへをしへをはる（伝教）ならひをはる（習）にんじをはる（任）まひをはる（舞）むまれをはる（生）よみをはる（読）をがみをはる（拝）

また、説話は、軍記とともに、「をはる」を後項にとる複合動詞が比較的多く存する点で、他の鎌倉時代の文献とは異なっている。ただし、その用例数や異なり語数は説話の方が軍記よりも多い。

説話においては、「〜はつ」「〜をはる」の前項は「まふ（舞）」以外は重ならないが、「〜をはる」の前項のうち、「かうず（講）かく（書）よむ（読）」はその他の鎌倉時代文献において「〜はつ」の前項となっており、「をはる」「はつ」の用法の区別が曖昧になっていると考えることができる。以下に、前項を共有する「まひはつ」「まひをはる」の例を掲げるが、両者には意味用法上の違いを見出しがたい。

・舞はてゝ入ける時、桜人をあらためて蓑山をうたはれければ、政方又立帰て同急を舞ける。（古今著聞集 二四三・巻第六管絃歌舞

第七・二〇一頁）

・はじめはのどかにまひて、すゑざまにはせめふせければ、上下めをおどろかして興じけり。まひはてゝは必纏頭をこひけり。（古今著聞集 七一六・巻第二十魚虫禽獣第三十・五三五頁）

・舞おはりて御倚子のもとにめして、御袒をたまはせければ、（古今著聞集 二四二・巻第六管絃歌舞第七・二〇〇頁）

・舞終りて、公貞をも舞せられけり。（古今著聞集 二七〇・巻第六管絃歌舞第七・二二一頁）

・舞終て、船吉実散楽を供しけり。（古今著聞集 三七一・巻第十相撲強力第十五・二九六頁）

・舞をはりて、更に双調を奏す。（古今著聞集 六四九・巻第十九草木第廿九・四九四頁）

五・五　軍記の用例

軍記では、説話と同様、「はつ」と「をはる」とがともに用いられている。

○「はつ」

・正清、浅笑テ、詞モタバワズ申ケルハ、「日来ハ相伝ノ主、只今ハ八逆ノ凶徒也。正清ハ副将軍ノ宣旨ヲ蒙タリ。相伝ノ主ノ御身ニ、郎等ノ射矢ハ、立ヤ不レ立ヤ、試給へ。此矢ハ正清ガ射矢ニ非ズ。伊勢太神宮、正八幡宮ノ御矢也」トテ、我詞ハテナバ、此君ニ射ラレ奉ナンズト思テ、一ノ矢ヲ放ケレバ、（保元物語 中・五五頁）

　↓ 正清の言葉

・案のごとく、五節はてにしかば、殿上人一同に申されけるは、（平家物語 巻第一 殿上闇討・上八七頁）

　↓ 五節

・祇王すでに、いまはかうとて出けるが、なからん跡のわすれがたみにもとやおもひけむしやうじになく〳〵一首の歌をぞかきつけける。

　もえ出るもかるゝもおなじ野辺の草いづれか秋にあはではつべき（平家物語 巻第一 祇王・上九九頁）

　↓ 野辺の草（祇王）

・「心ざしの程はゆゝしかり」とて、供養はてて都へいらせ給ひて、六条河原にてきられにけり。（平家物語 巻第十二 六代被斬・下四一七頁）

　↓ 大仏供養

○「をはる」

・「弓矢取身ノ習、興アル事カナ。伊勢平氏ガ郎等ニ引張レテ出テ、子共ノ面ヲヤ穢サンズラント思ツルニ、我子ニ請取ラレテ、年来

ノ家人正清ガ手ニ懸ラン事コソ神妙ナレ。然モ朝敵ト成テ被レ切事、誠ニ面目也。弓矢取身ノ名聞、何カ是ニ如ム」。此詞終ザルニ、正清、首ヲ討トスルニ、目モ暗レ、肝消テ、叶マジケレバ、側ナル者ニ太刀ヲユヅル。（保元物語 下・一〇三頁）

↓ 為義の言葉

・鳥羽院の御宇に、清盛公いまだ安芸守たりし時、安芸国をもて、高野の大塔を修理せよとて、渡辺の遠藤六郎頼方を雑掌に付られ、六年に修理をはぬ。修理をはて後、（平家物語 巻第三 大塔建立・上二二三頁）

↓ 高野山の根本大塔の修理

・御門かくれさせ給ひしかば、公卿僉議あり。「（略）」と儀定畢ぬ。（平家物語 巻第八 名虎・下一一二五頁）

↓ 僉議の儀定

・中将なのめならず悦て、聖を請じたてまて、なく〳〵申されけるは、「（略）。かくてむなしく命おはりなば、火穴湯の苦果、あへて疑なし。ねがはくは、上人慈悲ををこしあはれみを垂て、かゝる悪人のたすかりぬべき方法候者、しめし給へ」。（平家物語 巻第十 戒文・下二五五頁）

↓ 中将重衡の命

・「昔天照大神百王をまもらんと御ちかひありける、其御誓いまだあらたまらずは、神鏡実頼が袖にやどらせ給へ」と申させ給ふ御詞のいまだをはらざるさきに、飛うつらせ給ひけり。（平家物語 巻第十一 鏡・下三五五頁）

↓ 実頼の言葉

軍記では、「はつ」と「をはる」がともに用いられ、しかも両者に意味用法上の相違が見出しにくくなっている。「言葉」に対して「はつ」を用いた例もあれば「をはる」を用いた例もみられるのである。この点で、説話と同様の傾向を示す。ところが、「はつ」「をはる」が後部要素となる複合動詞をみると、以下に示すように、「〜はつ」が「〜をはる」よりも優勢である。この点が先の説話とは異なる点である。

○「〜はつ」

ありはつ（有）あれはつ（荒）いさかひはつ（争）いはせはつ（言）うしなひはつ（失）うせはつ（失）うとみはつ（疎）おちはつ（落）おとしはつ（落）おほせはつ（仰）かはりはつ（変）かれはつ（枯）きえはつ（消）ききはつ（聞）きこしめしはつ（聞召）きれはつ（切）くたびれはつ（草臥）くだりはつ（下）しづみはつ（沈）しにはつ（死）すてはつ（捨）すみはつ（住）そひはつ（添）そむきはつ（背）たえはつ（絶）つかれはつ（疲）つきはつ（尽）ながらへはつ（永）なりはつ（成）のがれはつ（逃）のたまひはつ（宣）

ほろびはつ（滅）ほろぼしはつ（滅）まうしはつ（申）みはつ（見）やつれはつ（）よわりはつ（弱）わかれはつ（別）

○「〜をはる」

あづけおきをはんぬ（預置）ちうせられをはんぬ（被誅）ほろびをはる（亡）やぶりをはんぬ（破）せいりやくせしめさうらひをはんぬ（令省略候）ながくそのおもひをたちさうらひをはんぬ（長断其思候）

右の「〜をはる」のうち、「令省略候畢」と「長断其思候畢」の二つは、ともに文書の中で常套句的に用いられており、用法・形態の面からみても、その他の「〜をはる」とは同列に扱えないものと思われる。いまこれらを除外して考えると、軍記においては、単独用法では「をはる」が用いられるが、複合動詞後項の用法では「はつ」が用いられる、という点が指摘できよう。

このことから、軍記において、「はつ」は、単独用法では「をはる」と共存して用いられていたものの、複合動詞後項の用法においては、平安時代に引き続いて盛んな造語力を発揮していたことがうかがえるのである。また、「〜はつ」「〜をはる」の造語力が、説話と軍記とでは異なっているという予想も成り立つのである。

五・六　鎌倉時代のまとめ

以上、鎌倉時代の文献について、通時的な観点と、共時的な観点との二つの観点から「はつ」「をはる」の検討を行なった。

通時的な観点からは以下のことが明らかになった。

中世王朝物語では「源氏物語」にみられたような「をはる」の限定的用法はみとめられない。また、他の平安時代和文の「をはる」の用法からは、わずかに用法が拡大している。このことから、いわゆる和文語の性質が、平安時代と鎌倉時代後期とではやや異なっているらしいこと。

どこがどのように変化しているかについては今後の課題であるが、類例を検討することによって明らかにできると考える。

また、共時的な観点からは以下のことが明らかになった。

中世王朝物語よりも、中世女流日記の方が「をはる」を多く用いている。また、説話には「〜をはる」が比較的よく用いられるが、軍記ではほとんど用いられない。このことから、和文や和漢混淆文といった各種文体の内部にも、それぞれの下位レベルで性質の異なる文体がみとめられること。

これについても今後類例を検討してゆくことで「性質の異なる文体」の細部を明らかにすることができると考えている。

六　おわりに

以上、述べてきたことをまとめると、次のようになる。

平安時代和文において、「動作・事柄が終了する、最後まで行なう」意味を表わす動詞としては専ら「はつ」が用いられ、「をはる」は特別な場合（人の死・仏教行事の終了）を除いては用いられない。この使い分けは、和文対漢文訓読文という文体の違いに応じたものであったと考えられる。

中世王朝物語においては、「をはる」が用いられており、しかも用法がやや拡大している。このことから、中世王朝物語の用語は平安時代物語文のそれからはやや変化しているらしいことが明らかになった。

中世女流日記では、中世王朝物語よりも多く「をはる」を用いている。この点で、中世王朝物語との間に差異が存することが明らかになった。ただし、やはり「をはる」を後項にとる複合動詞はみられない。

随筆である「徒然草」については、用例が少ないためはっきりしたことは言えないが、中世王朝物語と同様の傾向を示す。これはいわゆる「擬古文」であるためか。

これに対し説話においては、「はつ」と「をはる」とがほぼ同数ずつ用いられており、両者の意味用法も接近している。平安時代和文において認められた「をはる」の用法の偏りも認められない。そして「をはる」を後項にとる複合動詞が相当数用いられている。

軍記は、説話と類似した傾向を示すが、「～をはる」の用例がほとんど存しない点で異なっている。ここに、和漢混淆文体内部の相違が現われていると考えられる。

残された課題は多い。

まず、平安時代の漢文訓読文の用例を検討して、共時的に「はつ」「をはる」の意味用法と両者の関係を明らかにする必要がある。その上で、今回の考察結果をふまえて、「はつ」「をはる」の複合動詞後項としての意味用法を明らかにする作業が必要となる。そうすることにより、和文の複合動詞の文体的性格を明らかにすることができ、また、複合動詞を視点とした文体史の研究も可能となるであろう。

（注）

一　「中世王朝物語」とは、鎌倉時代から室町時代にかけて成立したとされる、平安時代の王朝物語的な内容の物語作品群をいう。

二　拙稿「平安・鎌倉時代における「動詞＋テ＋キル（居）」の意味について」（『鎌倉時代語研究』第十八輯・平成七）

これ以外では「いく（ゆく）（行）」「おく（置）」「く（来）」「みる（見）」などがある。

三　「はつ」「をはる」以外で考えられるのは、例えば以下の組である。

【開始】そむ（初）はじむ（始）
【中止】さす（止）とどむ（止）やむ（止）
【訂正】あらたむ（改）なほす（直）
【喧騒】さわぐ（騒）とよむ（響）ののしる（罵）ゆする（揺）
【困難】こうず（困）なやむ（悩）わづらふ（煩）わぶ（侘）

四　築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（東京大学出版会・昭和三八）三三九頁（第四章　漢文訓読語の語彙・二　訓点特有語彙の語性別分類・十一　動詞のB　源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの）

五　大坪併治「ヲハルとハツ」（『岡大国文論稿』第四号・昭和五一）

六　本稿で使用した文献とテキストは以下の通り。
『源氏物語大成』校異篇（池田亀鑑・中央公論社・昭和二八～二九）
『古今著聞集』（日本古典文学大系・岩波書店・昭和四一）
『十訓抄　本文と索引』（泉基博・笠間書院・昭和五七）
『鎌倉時代物語集成』第一～五巻（市古貞次　三角洋一・笠間書院・昭和六三～平四）
『源氏物語外篇　山路の露　本文と総索引』（山内洋一郎・笠間書院・平成八）
『中世日記紀行集』（新日本古典文学大系・岩波書店・平成二）
『とはずがたり　たまきはる』（新日本古典文学大系・岩波書店・平成六）
ただし『とはずがたり総索引』（辻村敏樹・笠間書院・平成四）を用いて用例を検索した。
『徒然草総索引』（時枝誠記・至文堂・昭和三〇）
『保元物語　平治物語　承久記』（新日本古典文学大系・岩波書店・平成四）
『平家物語』上下（日本古典文学大系・岩波書店・昭和三四～三五）
用例は、テキストの本文が底本の文字遣いをルビ等で残している場合にはそれに従った。

七　以下の文献を検索した。
竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語・かげろふ日記・宇津保物語・落窪物語・枕草子・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・夜の寝覚・狭衣物語・浜松中納言物語・栄花物語・堤中納言物語・大鏡

八　（注四）に同じ。

九　漢文訓読文における意味用法については、いまだ漢文訓読文の用例を検討しておらず、明確なことを述べ得ない。今後の課題としたい。

後　記

本稿は、第四十二回国語学会中国四国支部大会（平成八年十一月九日　於岡山大学文学部）にて口頭発表した内容を加筆修正したものである。発表の席上、大坪併治先生・小林芳規先生・関一雄先生をはじめ、諸先生・諸学兄より貴重な意見を賜わった。また、成稿にあたっては、室山敏昭先生・松本光隆先生の指導を賜わった。ここに記し、深謝申し上げる。

――おかの・ゆきお、鳥取女子短期大学助手――